

《新刊紹介》

シテイスマンダリ・スロト著
舟知 恵・松田 まゆみ 訳

『民族意識の母カルティニ伝』

利 光 正 文

インドネシアの民族主義運動についての研究は、第二次大戦後、アメリカ人研究者を中心に精力的に行なわれてきた。日本でも近年、民族主義研究の進展はめざましく、例えば、永積昭氏の「ブディ・ウトモ」の研究、土屋健治氏の「タマン・シスワ」の研究、深見純生氏の「サレカット・イスラム」の研究等が、すぐ頭に浮かんでくる。勿論、他にも多くの研究者が輩出し、すぐれた論文が世に問われている。インドネシアにおいても、この運動についての研究は盛んになりつつある。こうした傾向に拍車をかけるであろう伝記が公刊された。それが、ここで紹介する『民族意識の母カルティニ伝 (KARTINI Sebuah Biografi)』である。

カルティニは蘭領東インドにおいて、女子教育や女性解放を叫んだ開明的ジャワ女性であり、加えて民族主義運動の先駆者として、現在、インドネシアの国家英雄とされている傑出した人物でもある。彼女の思想については、友人達と文通した多数のオランダ語の手紙が残っており、既にその書簡集が出版（蘭・日・英各語）されているので、かなりよく知られている。又、日本では戸田金一「オランダの言語教育政策とその反響」（近代アジ

ア教育史研究・上巻」(岩崎学術出版社、一九六九年、所収)や永積昭『インドネシア民族意識の形成』(東京大学出版会、一九八〇年)によっても、カルティニの人となりや足跡がある程度理解できる。

しかしながら、これまでカルティニの本格的な伝記は書かれておらず、その二五年の生涯における不明な部分も多くあった。本書の著者シテイスマンダリ・スロト女史は、ジャーナリストとしての鋭い観察力に基づき、埋もれた資料を丹念に掘り起こすと共に、カルティニゆかりの人々とのインタヴューを通して事実関係を考証し、同じインドネシア人女性としての義務意識にも駆られてこの書を書き上げている。

さて本書は、序章 カルティニの闘争の時代的背景、第一章 チョンドロネゴロ家の系譜、第二章 幼年時代から婚前閉居に入るまで、第三章 地獄のような四年間——目覚めと自己教育、第四章 再び結ばれた三姉妹——最も幸福だった六年間、第五章 一九世紀から二〇世紀への推移期、第六章 カルティニと「倫理主義」、第七章 法学士J・H・アペンダノンとの相識、第八章 ファン・コルの役割、第九章 人間カルティニの悲劇、第十章 レンバンにて、第十一章 神の許に召される、第十二章 カルティニの死の後で、第十三章 カルティニ、インドネシア国家英雄に列せられる、により構成されている。

それでは以下、その概要を述べてみたい。序章と第一章は、カルティニの生きた時代と彼女の系譜(ルーツ)についての説明である。彼女が過した一九世紀末から二〇世紀初頭は、「西欧の新思想の流入を大きく妨げた封建的慣習の強固な残存」(六頁)がみられた時代であり、オランダの植民地支配が徹底していた。ただし、蘭領東インドと言えは殆んど「ジャワ(爪哇)」のことを指しており、カルティニの思考もジャワに限定され、「インドネシア」にまで及んでいない。それから、カルティニの出身は由緒正しい貴族の家柄であり、祖父チョンドロ

ネグロ四世は、当時のジャワ貴族の中では子女に西欧教育を受けさせた最初の革新的な人物であったし、父ソスロニングラットも祖父に劣らず西欧教育の草分けであった。こうした恵まれた家庭環境に彼女は育ち、進歩的な気風が自身の血の中に脈々と流れていたわけである。ただし、カルティニの母が副妻であったことは、後年彼女に一夫多妻制の不合理さを訴えさせる大きな原因ともなっている。

第二・三・四章は、カルティニに課せられた十二才から四年間の「婚前閉居」に大部分の筆が割かれている。オランダ初等学校を卒業した彼女は、当時のジャワ貴族の娘の常として、外出を全く禁じられ、家に閉じ込められてしまった。この「婚前閉居」の期間は、カルティニに精神的意味において「地獄の責め苦」を与えたが、ジャワ人の女性を縛っている多くの封建的慣習に気づかせ、自我を確立させてゆく言わば「目覚めへの旅」の時期でもあった。この不自由な身をいやす唯一の手段はオランダ人の友との文通であり、手紙の中で内面の苦悩と思索を吐露している。この時期カルティニが考えたことは、何故、ジャワの女性達が男性に対して一方的な忍従を強いられているのか、という事であった。それは、女性が教育を受けることもなく無知のままに留まり、経済的にも総てを男性に依存しているが故であった。こうした状態から抜け出す道として、女子教育、しかも経済的自立のすべをも授ける教育の必要性を痛感した。

さらにカルティニの思考は、女性への束縛から民族の状況にまで広がってゆく。オランダ人の親友ステラに宛てた手紙(二九〇〇年)の中に次の様なくだりがある。「……(前略)……オランダ人の中には、親友と言える人達が多勢います。しかし私達に敵意を持つ人もまた多勢います。理由は他でもない、私達が大胆にも学問や文化の面で彼等と対等に渡り合うからなのです。彼等の敵意はいやがらせという形であらわれます。『私はオラン

ダ人。お前はジャワ人！』つまり別の言葉で言えば——『私は支配者。お前は被支配者！』ということです。……(後略)……」(二〇四頁)。この時カルティニは十八才であるが、すでに民族的自覚に目覚めていたと言えよう。

第五章から七章は、オランダが二〇世紀の初頭より始めた植民地政治「倫理政策」とカルティニとの関わりである。倫理政策の重要な柱の一つはインドネシア人への教育であったので、カルティニの理想、即ち女子教育のための学校設立と当時の植民地政策がびつたりと一致したと言えよう。特に、カルティニが植民地政庁の教育局長アベンダノンの知遇を得たことは、彼女の名声を一段と高めた。彼は倫理政策の熱心な推進者であったし、その政策実行のためには彼女を必要ともしていたわけである。しかしながら、このことが後年カルティニに大きな苦悩を強いる原因ともなる。

第八・九章は、「カルティニの経歴の中の最も黒いページ」(二三六頁)についての記述であり、著者が非常に力を込めた部分でもある。カルティニと妹ルクミニは、プリアイ(貴族)の女子寄宿学校を開くための教育学を学ぶべくオランダ留学の夢を持つに到った。オランダ下院議員で社会主義者ファン・コルの奔走、植民地大臣イデンブルフの学費給付決定、事は総て順調に運び留学条件は全部整う。けれども、突然カルティニはオランダ行きを断念してしまう。それは、アベンダノンによる阻止工作であり、彼の説得によつての翻意であった。アベンダノンは、カルティニ達がオランダより帰国すると「オランダ育ちの令嬢」と見做され、同胞の母親が娘達を彼らに託することを躊躇し、学校設立が失敗すると脅した。さらに、植民地政庁へ学校設立を願ひ出れば、すぐにでも許可が得られるだろうとの甘言でカルティニを翻意させた。著者はカルティニがオランダ行き

を断念したことについて、カルティニの人間の限界を感じると共に、「その真相はいまだに奇怪な謎に包まれている」（二六九頁）としながらも、蘭領東インドの実情が本国に伝えられるのを極度に恐れるアペンダノンの高度な政治的判断により「蘭領東インド政庁の利害のために犠牲にされたのだ」（二七三頁）とする親友ステラの推測に肯首している。

第十章から十三章は、カルティニの結婚生活と急逝、そして死後インドネシアの国家英雄に列せられるまでの経過報告である。複数の妻を持ち、あまり進歩的でもない夫ジョヨアディニングラット（レンバン知事）への失望の日々の中にあっても、自宅で小規模ながらプリアイ子女の為に私塾を開き、女子教育を実践しようと奮闘する様が描かれている。カルティニ死後はオランダやジャワで基金がつけられ、女子教育のためのカルティニ学校が各地に建立され、彼女の理想が現実のものとなってゆく。そして、インドネシアが独立達成後、カルティニは国家英雄とされ、インドネシア人の心の中に生き続けることになる。以上がこの書の大要である。

本書は、インドネシア史を学ぶ者にとって必読の書であることは多言を要さないが、カルティニが目ざした学業よりも品性の陶冶を優先させる教育理念は現代にも通じるものがあり、教育関係者にとっても一読に値する書物であろう。

最後に、訳者の舟知恵・松田まゆみ両氏はインドネシア語に熟達しており、名訳である。

（一九八二年七月刊、井村文化事業社刊、四〇〇頁、二、八〇〇円）